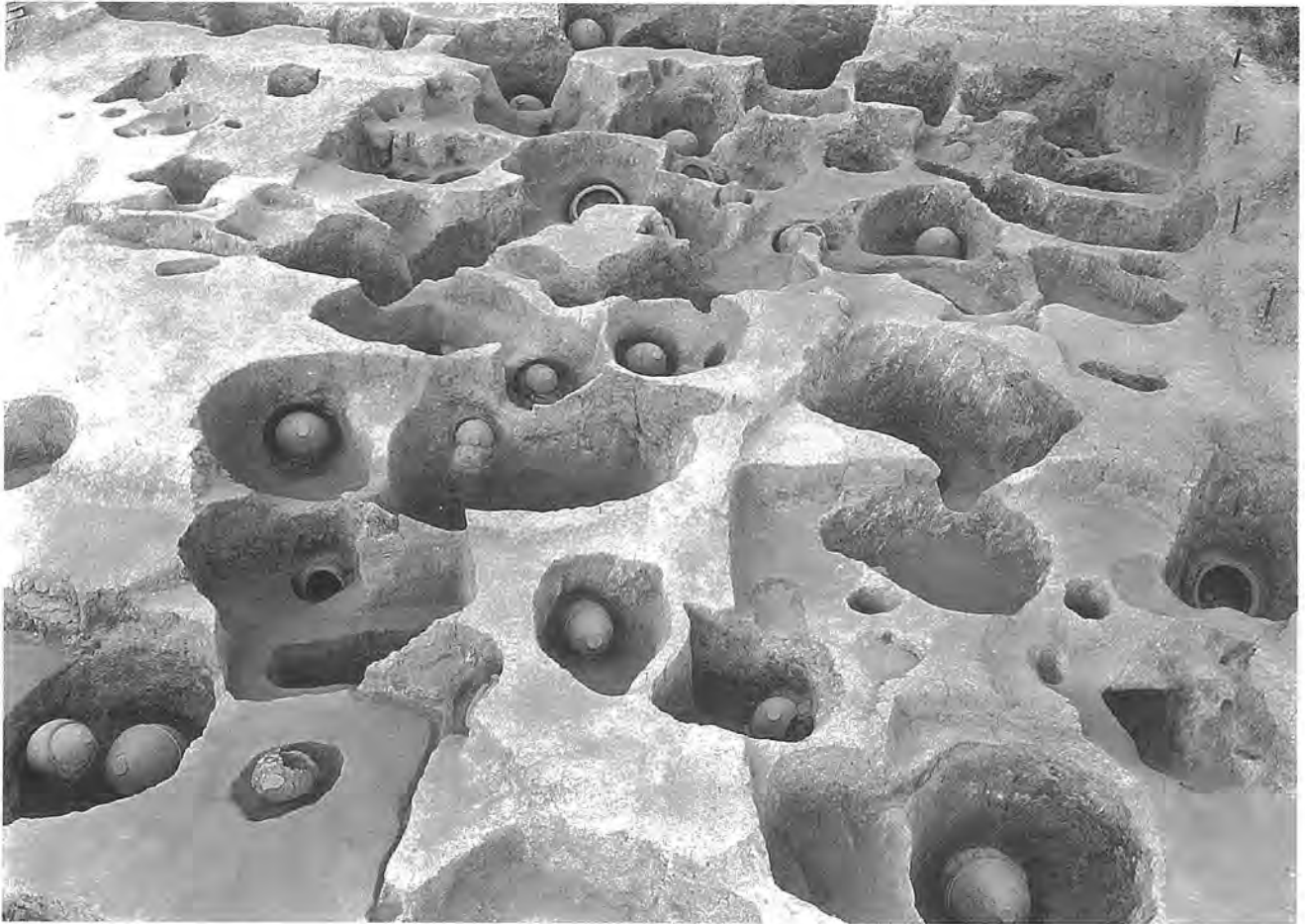


太宰府

1996
4.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514



(写真提供・九州歴史資料館)

太宰府の文化財 ⑬①

かめ かん ぼ
甕 棺 墓 弥生時代

約2000年前の弥生時代のお墓の形式です。大形の甕を遺体埋葬のお棺に使っているのが甕棺と呼ばれています。はじめは、殊に小児用は日用に使っていた甕を利用したのかもしれませんが、大人用はそのため大形の甕を焼いています。地域あるいは時期によって甕の形、口へり、胴部の文様などに変化があり、墓地の時代を決める時の手掛かりになります。

甕をどのようにしてお棺に使うのか、その形式はいくつかあります。一番多いのは、二つの甕を合わせ口にする方法で、他には甕にもう一つの形の異なった甕をかぶせたり、石で蓋をしている形のものもあります。遺骸はあお向けで膝を曲げた姿勢をとっています。

甕棺墓は集落に近い所に共同墓地として作られ、何世代かにわたって、その数も2〜300基を超える所もあります。そのほとんどに、副葬品と呼ばれる物が入っていませんが、中に国産はもとより朝鮮半島や中国から輸入した青銅製の武器や装身具を持っている甕棺があります。それは弥生社会のなかに身分の差が生まれてきたことを窺わせています。

写真は高雄丘陵にあった吉ヶ浦遺跡ですが、ここでは72基の甕棺墓が出土しました。甕棺の中から絹織物の一部や麻布片が見つかりましたが、副葬品といわれるものは、一基のみがイモガイ製の貝輪をもっていただけで、この墓地はごく普通の人たちのお墓だと考えられています。

北部九州にだけ行われた特異な埋葬法の甕棺墓は、弥生時代の終わりごろには衰退していきます。

太宰府

1996
5.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

(132)

木造釈迦如来坐像

ヒノキ材 70・2センチ
平安鎌倉時代 光明寺蔵



太宰府天満宮の近くの光明寺の本尊です。穏やかな顔で結跏趺坐する姿は平安時代から鎌倉時代へ移る、ちょうど過渡期の仏像といわれ、腹部に裳の紐の結び目を見せているのは珍しい形だそうです。

また体内に銘文があり、江戸時代の宝永2年(1705)に修理されています。費用は前任職の知的禅師の浄財を主に、戒壇院住持運照律師が化主として喜捨を集めたようです。修復の仏師は、照暁という京仏師でした。仏師照暁と運照律師は戒壇院の本尊の修復、文殊・弥勒両脇侍(平成5年9月1日号参照)、鑑真和上像(平成5年10月1日号参照)の制作をした人です。二人はほかにも天満宮安楽寺の薬師如来の修復など、元禄9年(1696)から宝永7年(1710)までの15年間に筑前内の社寺で10件余の仏像制作や修理にかかわっており、その活動には興味が持たれます。

なおこの仏様は宝永当時すでに方丈つまり本堂の本尊で、恵心僧都の作と伝えられていたようです。恵心僧都は源信ともいい、平安中期の天台宗の高僧で『往生要集』を著した人ですが、各地の仏像や仏画の伝説上の作者としても知られています。

この本尊はどういう縁で光明寺に安置されたのでしょうか。

太宰府

1996
6.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

(133)

御笠郡大佐野村軸帳

江戸時代 個人蔵



御笠郡大佐野村軸帳表紙

江戸時代の人々もいろんな税を負担しなければなりませんでしたが、村では個々の農民が各自直接、郡役所へ納税するのではなく、役所への直接の納税義務は村が持っていました。これを「村請」といって、租税は村を単位にかけられ、そのための基本台帳が軸帳です。太宰府市には大佐野村と国分村の軸帳が残っています。ここでは具体例として大佐野村の軸帳をのぞいてみましょう。

（田畠に石高当たりの年貢率（石別）を掛けて年貢米（徳米）を計算し、それから洪水などで耕作が不能になつた田（永蒔分の控除（徳引）、村で弁う分として一応、徳米計算から除かれている一時的荒地（当道溜池面積（堤床を引き、実際の石高（現田高）、年貢米、年貢率を記しています。次に原野を開墾して田（志作）にした分と、それにかかる年貢米を書き、畠作の分も田と同様な計算式で年貢の大豆の高が決められました。徳米・

徳大豆の下の「口共」とは「口米共に」の意で、初めは年貢徴収にあたる代官の事務費でしたが、後には代官の役料は藩から支給され、口米は藩の収入になりました。

その他付加税の小物成として、種籾米―三割の利付きで貸した種籾代、三合夫米・二合夫米―高一石につき三合ずつあるいは二合ずつ上納させ小役人を雇った、用心除米―飢饉などの非常備えとして、切扶先納小夫詰夫給米―郡雇いの役人の給米の5種類。御鷹餌五勺米―藩主の鷹の餌代、御郡切立・村切立―郡や村

の必要経費と税目が続きます。村切立に山家・原田・二日市・福岡の宿米とあるのは街道筋の村として伝馬役を負担したのでしよう。

最後の上納銀には三品銀―郡請銀・高請銀・乗馬飼料銀、山札銀―野山の灌木や雑草を刈り取る免許料、村救銀―困窮農民への無利子貸付のための積立、御用竹木持出夫銭―竹木運搬の夫役代、藪坪銀―藪の持ち主が払う、などがあり、これら税とは別に宗旨改めの費用が人別に徴収されています。なんとかかるとかいろんな税で江戸時代の人も大変でした。



上納銀に関する記述

太宰府



■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

134

御笠郡国分村田畠名寄帳

御笠郡大佐野村徳割帳

江戸時代 個人蔵

先月は村ごとに納めなければなら
ない租税の台帳「軸帳」について紹
介しましたが、今月はその軸帳に記
載された租税の年貢を算出するた
めの基礎資料となる農家一軒一軒の田
や畠の面積を書いた「田畠名寄帳」

市内では国分村の寛政13年(18
01)の名寄帳が残っています。そ
れには戸主の名が書かれ、次にその
家所有の田圃が所在地(小字)ごと
に田の等級・面積・収穫高の順に記



御笠郡国分村田畠名寄帳

されています。そして田の総面積と
総石高が記され、次に畠について同
様な書き上げが行われています。

田畠の等級は上・中・下・下々で
表され、屋敷地も上畠と見なされ、
課税の対象となりました。そのため
でしょうか、屋敷地が1畝(30坪)

以下の家が約半数、そして本百姓で
ありながら自分の家を持たない者が
7人もいます。

名寄帳の奥書きによると、藩は畝
替・畝隠しはもちろん、勝手に上・
中・下の等級を替えたり、高を盛り
替えることは禁止であり、他人はも
ちろん親類といえども田畠を譲り渡
す時は、証人を立て、庄屋なども証
文に印を押して10日以内に名寄帳を
直すよう厳しい規制をしています。

この名寄帳を基に村全体の納税額
が決められ、田畠面積に応じて個人
個人が負担する税額が決められます
が、それを書いた帳簿が「徳割帳」
です。太宰府では大佐野村の慶応2
年の徳割帳があります。

農民一人一人について軸帳に上げ
た徳米・徳大豆・諸上納の米と銭・
藪坪の個人負担額が記され、他に軸
帳にはない「津出来・社倉米元利・
触村臨時」などの上納米が数俵も課
せられています。

名前が書かれた農民はそれぞれの
記載事項を確認して判を押し、自分
の分の写しをもらって、税を納めま
した。

以上のように田畠名寄帳・軸帳・
徳割帳の三帳は農民から税をとる上
での三点セットでした。



御笠郡大佐野村徳割帳

太宰府

1996
8.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

135

齋串・木製人形

奈良く平安時代
太宰府市内出土

0157という病原性大腸菌による食中毒は、人々に、ことに子供がいる家庭に不安を広げつつあります。医学が発達した今日でさえこのような状況ですから、昔の人々にとって一番こわいのは病氣、災害でした。そして人知を超えるこれらは神の仕事、神の怒りと考え、怒りを鎮め、平安を取り戻すために、さまざまな

齋串は写真のように細長い薄板の頭を三角や斜めに切り、下方を尖らせて串状にしたものが一般的です。尖った先を地面に突き立て、祭りの場を区切る結界に使ったり、神を招く依り代にしたりします。そのため

齋串はそれ単独で使われるより、他の祭祀具とセットで使用されることが多かったようです。

その一つが人形です。人形は木や土、石、金属などで作られた人間のような形をしたもので、太宰府では写真のような木製の人形が出土しています。

木製の多くは薄板を加工し、頭部・胴体・手・足を削り出し、墨で顔を描いているものもあります。その顔は髭面で怒った表情やアンバランスな表情で、人間というよりは異界のもの、つまり鬼神を表しているの

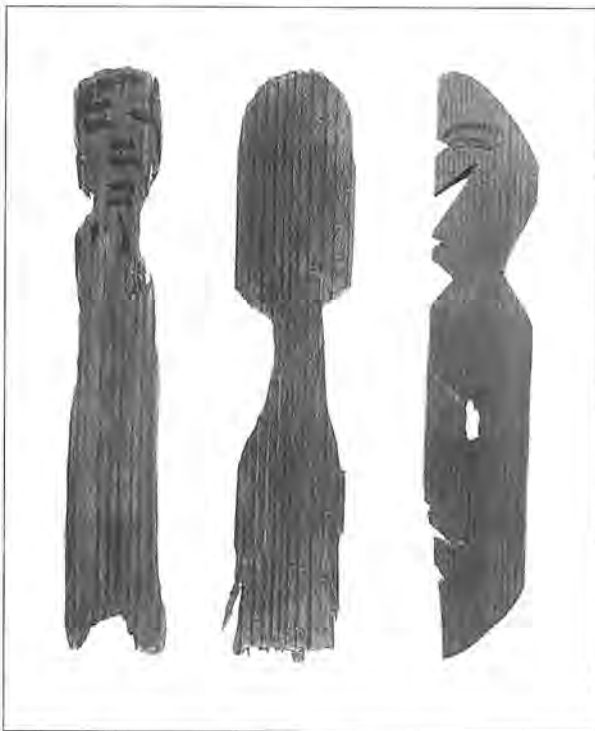
ではないかと考えられています。前述したように、病氣や疫病は鬼神のせいだ起こるといって考えは中国から伝わったもので、朝廷の儀式で祓が行われていました。人形に息を吹きかけ、体をなでて罪障を人形に移して川や海に流す、ですから人形に移るのには鬼神であって、祓をしている本人ではないのです。ただ後には人形の表情が、人間的な顔付のものも出現しますが、それは鬼神の依り代から、祓する本人の身代わりという考えの変化によるものです。

齋串や人形を使った祓の儀式は朝廷の強い意思により、諸国へ広まったと思われ、大宰府や地方の役所跡を中心に全国から遺跡が見つかったりします。



齋串

(写真提供…九州歴史資料館)



人形

(写真提供…九州歴史資料館)

太宰府

1996
9.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514



太宰府の文化財 ⑬③

光明寺の本堂 江戸時代 馬場区

光明寺の現本堂は安政3年(1856)に建てられ、明治42年、大正4年、昭和13、15年、そして昭和47年の修理改修を経て現在の姿になりました。

形は入母屋造りの大きな建物で方丈らしい姿をしています。

その本堂に建立棟札が残っていて、それを読むと本堂(客殿)再建にかかわった人々や方法などが想像され、なかなか興味深いものがあります。

棟札は安政3年7月上旬の吉日の日付で、当時の光明寺の住持であった瑤巖知珪和尚が記しています。

まず光明寺の親寺である承天寺の住職、そして太宰府天満宮の延寿王院大鳥居信余、次に会計係でしょう、銀預として2人の名が記されています。銀預の2人は普請の間は毎日出勤しています。お寺には長寿講という講があったようで25人が名を連ねており、交替で毎日出勤し普請を手伝っています。萱島・有岡・市川・櫻井・安恒など、現在もご子孫がいらっしゃるのではという名も見えます。

建築材の内、樟檜杉桐樺は境内の立木を使い、柱用の檜は紀州から取り寄せています。その材木や瓦・土の運搬は各組(門前町の組か?)から人夫役を出しています。礎石は桜馬場・連歌屋・三條町の若者組が運んでいます。

また実際に建築に携わった大工さんや下働きとして40人近くの名が記され、この中には吉田、山、市川という太宰府天満宮の本殿の修復や境内の建物の建立にかかわって名が見える大工の家や人もいます。

建設費は総額で9000両(現在の約9000万円)、その内2000両はお寺が用意し、残りは寄附を募ったようです。

太宰府

1996
10.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

137

庚申塔

江戸時代〜昭和時代
市内全域



市内にある石塔の中で最も多いのが庚申塔と総称される石碑で、58基建っています。総称されると言いましたのは、写真のように「庚申尊天」「庚申天」と刻まれた石塔のほか、「猿田彦大神」「猿田彦尊」「青面金剛」などと記されたものも庚申塔に含まれるからです。ところで庚申塔はどういう性格の石碑でしょうか。まず庚申とは十干

十二支の組み合わせの一つ、かのえさることです。暦でいえば60日に1度巡って来、この日、人間の体内にいる三尸という3匹の虫が、人間が眠ると体から抜け出し、天帝にその人が犯した罪を報告して寿命を縮めると考えられました。そのため、この夜は寝ずにいるとよいという中国の道教の教えに、仏教、神道、その他の民間信仰や習俗を合わせて日本の庚申信仰が生まれました。

平安時代ごろから行われた徹夜の庚申の行事「庚申待」は江戸時代に大変盛んになります。そして3年連続18回の庚申待を続けると三尸は滅び、天寿を全うできると、祈願成就を記念して建てたのが庚申塔の始まりです。

青面金剛は仏教式の庚申信仰で本尊とされ、それに対する形で神道側から主張されたのが「申」にちなんだ猿田彦神でした。猿田彦神は道祖神とも結びつくなど、庚申信仰は地域、時代によって様々な信仰と融合していきました。そして町では商売繁昌、農村では豊作、漁村では大漁全体として病氣平癒が祈られました。

太宰府でも田植えがすむと苗を3把あるいは1把、お神酒と一緒供えるそうです。

道のそばや村の出入口に建てられることが多かったこれら庚申塔も、車社会の現代では邪魔物扱いにされ、神社の境内に移されたり路端で身を縮めて立っています。

太宰府

1996
11.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514



太宰府の文化財 ⑬⑧

ひえ 日吉神社本殿拝殿

江戸時代 観世音寺五丁目

観世音寺の背後の高台に鎮座する日吉神社は観世音寺地区の鎮守様です。普通はヒヨシ神社と呼んでいます。日吉山王社で、京都の比叡山延暦寺の鎮守神・日吉神社を勧請したものです。

いつ創建されたか、はっきりしませんが、平安時代の久安4年(1148)の『観世音寺堂舎損色注文』に「日吉社」とあるので、このころには祀られていたのではないかと考えられます。

また、天正15年(1587)島津氏を降伏させ、九州平定を達成した豊臣秀吉が太宰府天満宮安楽寺に参詣した折、この神社を宿陣としたと伝えられています。

このように長い歴史を持つ日吉神社は現在、拝殿とその奥に本殿が建っています。拝殿は入母屋造で、中に残る墨書記録から江戸時代の正徳4年(1714)3月に観世音寺村の住人によって建てられたことが分かります。その後、文久2年(1862)、明治25年(1892)、同42年(1909)に修理され、昭和13年(1938)に後側に増築が施されました。

拝殿内は中央に絵が描かれた格子天井があり、その他の部分もわずかに色が残る所もあるので、もとは彩色されていた可能性があるそうです。

奥の本殿は一間社流造で、拝殿と同じころ、建てられたと考えられています。

太宰府天満宮を除けば、市内に残る最も古い社殿として、これからも大切に守り伝えていきたいお社です。

太宰府

1996
12.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

(139)

十一面観音菩薩と二脇侍

佐賀県基山町大興善寺所蔵



十一面観音菩薩坐像	像高
不動明王立像	〃
毘沙門天立像	〃

104・5センチ	Ⓜ
93・4センチ	Ⓜ
95・6センチ	Ⓜ

写真の仏様は以前太宰府天満宮に安置されていましたが、明治元年の神仏分離令によって、大興善寺に移されたものです。

中心の十一面観音菩薩像は桧材の寄木造で、頭部や光背に銘文が残っているので作られた経緯などが分かります。それによるとこの三体は本地本尊十一面観音菩薩と二脇侍で、江戸時代の宝永3年(1706)に造られました。ただ、十一面観音像の顔は古い像の顔を修理して使ったと書かれており、こうすることで前のお像の力を受け継ごうとしたのか、大変興味深い手法がとられています。また、不動明王は平安時代後期の作ですが、この時修理されています。

本地仏とは神仏習合の時代、仏が仮の姿で表われたのが神と考え、神には本来の姿である仏がいるとして、その仏を言いました。天満宮では十一面観音が本地でした。

これらの修復、造仏は天満宮の宮司校校坊快鳳を願主として戒壇

院の運照律師が浄財を集め、京都の仏師照暁に造らせています。運照と照暁の二人は光明寺の本尊修復にも関わるなど(平成8年5月1日号参照)、協力し合って太宰府近辺の仏像の修理に活躍し、その動きが注目される人物です。

ところで、十一面観音菩薩を中心に不動明王と毘沙門天を両脇に配する形は天台宗の寺院によく見られるものです。

さて、この仏様たちは天満宮のどこに祀られていたか、いくつかの可能性が考えられます。一つは、心字池の中島に建っていた本地堂。しかし、天満宮にはほかにも本地仏の十一面観音菩薩像がありましたので、この三体が本地堂の仏様だったかは確証がありません。

もう一つは、願主が本殿の祭祀を受け持っていた校校坊だということ、本殿に安置された仏様だったとも考えられます。

この仏様たちは来年1月26日まで九州歴史資料館で拝観できます。

(写真提供・九州歴史資料館)

太宰府

1997
1.1

■毎月2回／1・15日発行 ■編集／福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

(140)

絵馬「西都奇観」の書ならびに孔雀図



けやき材

縦168・8センチ 横170・6センチ

文化13年（江戸時代）奥村玉蘭筆

太宰府天満宮蔵

絵馬は社寺に祈願のために奉納する絵入りの板額です。始まりは神仏へ馬を奉納する習わしにあり、ついで馬の代わりに土製や木製の馬形や板に馬の絵を描いたものを納めるようになりました。馬を描いた板絵が奈良時代の遺跡から見つかっています。後には画題は馬の絵だけでなく、武者絵・船・動物など様々です。さて、写真の絵馬は太宰府天満宮の絵馬堂に掲げられた博多中嶋町の奥村玉蘭奉納のもので、実は絵馬堂は同じ玉蘭によって、文化10年（1813）に奇進されていますので、その絵馬堂に3年後、玉蘭自身が筆をとって書き描いた絵馬を掲げたわけです。

「西都奇観」と題して孔雀やボタン・桜などの草木を描いています。孔雀という画題が大変奇抜だと思いましたが、なぜ孔雀を描いたのか。絵馬堂の紹介にも書きましたが（平成8年2月1日号参照）、玉蘭は大宰府跡を保存するなど、大宰府時代を慕い、絵馬堂自体も大宰府政庁の建物を模したともいわれていますので、絵も大宰府時代をイメージして描いた、つまり西都—大宰府ではないかと思えます。孔雀は華やかで見るからに南洋の鳥という印象ですし、奈良時代以前から時々日本に舶来していましたが、外国との窓口であった大宰府にふさわしいと選んだのではないのでしょうか。

マクジャク（動物園のはインドクジャク）の雄の飾羽が画面を大きく横切る構図、現在は緑青胡粉が残るのみで彩色が失われていますが、当時は極彩色であったろう色使いなど、文人玉蘭の偉才を如何なく発揮している画といえましょう。